

アメリカとソ連の間…昭和思想史の方法論的考察——コメント——

菅原 潤

今回のシンポジウムの目的は、二〇〇二年の「大正思想史の諸問題」、二〇〇四年の「思想史における一九三〇年代——京都学派の立場」を踏まえた上で、昭和思想史は可能か、あるいは戦後思想史は可能かという問題を論じることだと受け取っている。そのように考えれば、二つの報告のうち植村和秀氏の報告がこの問題に正面から取り組んでいるように思えるので、はじめに植村報告についてコメントを付し、その観点から米原謙氏の報告について若干の考察をしてゆきたい。

一 昭和思想史の年代はいつからいつまでなのか

先ず重要なのは、昭和思想史で研究の対象となる年代の確定である。やや雑駁な話になるが、今年で生誕百年を迎える松本清張の名著『昭和史発掘』は事実上二・二六事件までを扱っている一方で、選抜高校野球の一選手がブログに書いた「昭和くさい」という悪口が一時期話題になったことから分かるように、世代によって昭和のイメージが大きく異なっている。この問題は「昭和」のイメージに戦争が入っているかどうかを考察すれば一応クリアできるが、その先には「戦争」の名で想定され

ている第二次世界大戦の記憶を有しているかどうか、あるいは戦争についての語りやどう受け止めるかの問題が控えており、これについては冷静な議論がしにくい状況がいまだに続いている（この事情については、福岡良明『戦後体験』の戦後史―世代・教養主義・イデオロギー―中公新書、二〇〇九年が詳しい）。この点植村報告は視点をヨーロッパ史に求めているので、昭和思想史についての客観的な視座のみならず、二〇世紀世界における日本の位置づけについての一定の見通しも提供している。

植村報告は、ヨーロッパにおいて「長い一九世紀」と「短い二〇世紀」がしばしば対置されると言う。なぜ一九世紀が「長い」と言えば、一九世紀の展開を考えると上ではどうしても一八世紀後半に起きたフランス革命を考慮しなければならず、そして一九世紀に起きたことの結末を考えるには、やはり二〇世紀前半に起きた第一次世界大戦を念頭に置かなければならないからである。仮に一九世紀思想史という分野があるとした話だが、この思想史が扱う時間は一九世紀前後の年月を勘案して、おおよそ二二〇年ぐらいが研究対象となる時期だということになる。

こうした状況を受けて植村報告は、昭和思想史で研究対象となる時期の始まりは実際に年号としての「昭和」

が始まるよりも少し早い、一九二〇年代前半を想定している。江戸時代の名残が続いていた東京の文化状況が関東大震災で一挙に消滅したことを考え合わせると、この提案は妥当なものだと思われる。

そうすると今度は、昭和思想史の研究の年代はいつまでなのか当然問題になる。このことについて植村報告は判断を保留しているが、私自身は冷戦の崩壊した一九八九年でいいのではないかと考えている。ご存知のようにこの年は、年号としての「昭和」が終わった年でもある。あるいは、ソ連が消滅した一九九一年と考えることも構わない。この根拠になっているのが、第一次世界大戦中にロシア革命が起きていること、そして「長い一九世紀」の始まりがフランス革命になっていることである。ロシア革命がフランス革命の精神をどこまで引き継ぎ、どこから離反しているかは意見の分かれるところだが、フランス革命二〇〇周年の年に冷戦が崩壊したのは象徴的だという意見が当時相次いでいたことを想起すれば、広い意味での革命の伝統が終わった一九八九年前後を昭和思想史研究の対象時期の区切りとして提案したい。

二 アメリカよりもソ連の影が濃いのではないか

こうして一九二〇年代前半から一九八九年前後までを昭和思想史の研究年代だと確定すれば、昭和思想史の時代はソ連がこの世に存在した年代とほぼ重なることに気づかされる。このことはつまり、昭和思想史の研究のモチベーションとなるのが、よかれ悪しかれソ連的なもの、あるいはマルクス主義的なものだということを含意する。私見によれば日本におけるソ連の思想的な影響力は圧倒的であり、昭和思想史の年代の前後にフェミニズムと環境思想（大正期にはそれぞれ青鞥運動、新しき村運動と呼ばれている）が盛んなことも考え合わせれば、これら二つはソ連的なものに圧迫されたと考えることが出来るのではないか。

昭和思想史においてソ連的なものの色が濃厚だということは、翻すとアメリカの影がさほどではないという帰結になるので、私の提案はどうしても米原報告に対する違和感というかたちをとらざるを得ない。断っておくが、私は米原報告の意義を大いに尊重している。一九世紀に既に論壇にあった徳富蘇峰と二一世紀の現在の気鋭の評論家である加藤典洋を同じ組上で論じるというのは卓抜

な着想であり、大きな刺激を受けている。けれども、植村報告が呈示し私が昭和思想史の定義に用いた「短い二〇世紀」を物差しにすると、米原報告が対象とする年代は余りにも長いのではないだろうか。

もちろん米原報告が扱っているのは主に蘇峰の一九五〇年の記述であり、これに江藤淳や大江健三郎の発言を加えれば、米原報告の射程は先に定義した昭和思想史の範囲よりも狭い、戦後だと考えることができるのかもしれない。その意味で米原報告は、植村報告よりも今回のテーマである「戦前と戦後」の枠内に忠実なのかもしれない。けれども米原報告が主として論じているのはおよそ二〇世紀における日米関係であり、両国の潜在的な対立状況が太平洋戦争において爆発したとする視点は、第一次世界大戦を時代の転換点とする米原報告の見方とすれ違っているように見える。

ここには第一次大戦に対する日米両国とヨーロッパの見方の違いが反映している。ヨーロッパからすればこの戦争はヨーロッパ文明そのものの没落の前兆として捉えられ、そこから様々な思想が産み出されたのに対し、日本とアメリカは逆にこの戦争をきっかけに世界史の表舞台に立ち、ほどなくして太平洋戦争を繰り広げ、その結果アメリカがアジアにおける覇権を握ったと考えること

が出来る。この事実は日米双方の利害にとつては重要ではあつても、ヨーロッパ諸国にとつてはさほど重要ではない。ヨーロッパ人にとつて第二次大戦は——たとえホロコーストという悪夢があつても——第一次大戦の延長でしかないから、アメリカとの関係で日本の思想的状況を考察するのはアジアに限定的なものにならざるを得ないのではないか。

もちろん、こと敗戦後の日本におけるアメリカの影は圧倒的であり、アメリカ抜きで戦後の日本思想を考えることはできない。このことに私も賛同する。けれども戦後のそうしたアメリカの呪縛が、江戸時代に生まれた徳富蘇峰にもあるような捉え方は、むしろ戦後の視点で近代日本を捉えることにはならないだろうか。しかもアメリカの影の描き方は、アメリカによる占領によつてはじめて生じたものではなく、戦前の社会主義運動からの転向体験に裏打ちされた感性によるのではないか。そしてこう考えれば、ソ連体制の存続した時期を昭和思想史と見る見方と、戦後にアメリカの影が大きくなったとする見方は両立するのではないか。

三 女性の視点——昭和思想史と戦後を結ぶもの

このようにアメリカとソ連の間を揺れ動く日本思想のあり方を発想するきっかけになったのは、米原報告にある江藤淳の『成熟と喪失』の紹介である。改めて紹介されるまでもないが、『成熟と喪失』で江藤は小島信夫の『抱擁家族』にある、米兵に妻を寝取られた大学講師が米兵に抗議の声をうまく伝えられなかったエピソードから、母性に頼らず、また父でも息子でもない一人の「男性」の自立を読み取っている。このエピソードから私は、米原報告では触れられていないものの、中野重治の『村の家』の結末を連想した。

『村の家』の結末を念のため述べておくと、社会主義運動から転向し文筆活動に専念しようとする主人公に対して父が、この際いっそのこと断筆せよと迫るものの、「やはり書いて行きたいと思います」と主人公が反論するというものである。この話は吉本隆明の『転向論』において知識人の「大衆的な動向からの孤立感」を表明したものと捉えられたことで広く知られるようになったが、これもまた、大衆ないし父からどう思われようと自分の道を歩んでゆく自立の話と考えることもできる。

いずれの話もある種の敗北感から自らの道を模索する話であることが共通し、また書かれた時代が『村の家』が『抱擁家族』に先行することから、ソ連の影がアメリカの影よりも濃いことがうかがえるが、両者の間には一つ大きな違いがある。それは女性の存在である。『村の家』には確かに主人公の母親は登場するものの、父と子の対決の間には何の役割も果たしていないのに対し、『抱擁家族』における主人公の妻は、その不倫の行為を通じて母や妻であるよりも一人の女であることを選択したと考えることが出来る。そうだとすれば『抱擁家族』は、江藤が言うような父なるものの不在の話ではなく、女性的なものとの充滿だとして捉え直されるだろう。

戦前と戦後、あるいは昭和思想史を問題にするこの場でやや唐突に女性の視点を問題にするのは、上野千鶴子が『成熟と喪失』を自らの思想の原点だということをしればしばしば表明しているからである（彼女は講談社文芸文庫版では巻末解説も書いている）。私見によれば上野は戦後生まれの思想家として傑出した存在であり、いずれ書かれるべき戦後思想史の対象として真っ先に選ばれるべきだと思いが、いずれにせよ昭和思想史に戦後のものを読み込むときは、女性の視点が重要ではないかと思われる。

四 「戦後」は終わったのか

最後に「戦後」は終わったのか、もし終わったとしたらそれはいつだったのかの問題が残っている。現在の国際連合の体制が第二次世界大戦中の連合国の延長である事実を重視すれば、戦後は今も継続していると考えるのが妥当だろう。けれども、近い将来迎える「戦後七〇年」が果たして時代を説明する語として適切かどうか疑わしいので、そろそろ「戦後」の終わりをいつにするかを考える時期が来たように思われる。

その場合、世界的尺度で考えればイスラム文明の台頭を考慮すべきだと思うのだが、こと日本思想史にとつてイスラム教がそれほど大きな意味をもつのかという問題が残るので、これは時代の線引きのポイントにはならないかもしれない。もう一つの考えられる尺度は新自由主義だと思えるが、この評価はまだ定まっていないので、「戦後」の終わりの線引きはまだ模索中と考えるべきであらう。

(長崎大学教授)